

# 武家政権について

佐藤進一

「武家政権について」という題をかかげたが、一口にいつて鎌倉幕府・室町幕府さらに江戸幕府という日本の中で特殊な性質の政治権力が相当長い期間に亘って存在した事実を、日本の国家史の立場からどういう風にとらえるかということについて、若干の時間を借りてご批判を仰ぎたいと思う。

この問題についてはご承知と思うが、最近十年ぐらいのことだが、有力な学説として権門体制論というのがある。これについて大阪大学の黒田俊雄氏が最初に発表されたのは昭和三十八年（一九六三）で、「中世の国家と天皇」（岩波講座『日本歴史』中世2、所収）という題の論文で、そこで初めて権門体制論と名づけられる説を発表されたのである。この説を詳しく紹介する時間はないが、言ってみれば、主として問題にしているのは、鎌倉幕府を初めとする武家政権は、一見したところ一つの独立した国家権力のように見られ、またそのように理解されているがそうではない。その経済的基礎は、その当時の公家貴族大社寺というものと全く同じ荘園制的土地所有を基礎としている。公家貴族は国家の文官としての職能を持ち、社寺は仏法の力によって国家を護持するという職能を負わされ、またそれを果している。それに対して幕府は武力を持って国家を護るという役目を負わされている。

る。

こういう幾つかの基本的には性質を同じくする権門が相補い合って日本の国家体制を作っている、という理解である。

この説が出てから、従来の見解はだんだん色あせてきて、特に最近では権門体制論一色のように思われる。この問題について以前に多少書いた責任もあるので、もう一度検討してみたいと考えたわけである。

黒田氏の権門体制論は、京都の朝廷側の論理でありむしろ願望である。こういう状態がかつてあったということは否定しないし、その状態が存続することを京都の朝廷側として願っていたということは肯定するにやぶさかではない。また鎌倉幕府の側が黒田氏の理解を許す一面があることも事実なのである。例えば、頼朝が亡くなって二代将軍頼家が家を継いだ時に、京都の朝廷の方から今まで通り御家人を使つて諸国を守護せよという宣旨が下っているわけである。このことは家来を使つて国家を守護せよといっているわけで、一つの武力集団を国家の警備の役にあてているのであり、幕府の方でもそれを否定してないことである。

もう一つは、鎌倉幕府の場合に御家人の最も重要な軍役として京都大番役に従事することが義務付けられている。これもおかしい話で、

御家人が主人の頼朝の身辺を護るのならわかるが、京都へ行って皇居を護ることを義務付けられるのは、頼朝が皇居を護る義務を負わされており、それを自分がやらずに家来にやらせるといふ論理としか考えられないのである。

こういうことを考えると、確かに幕府が軍事力を以て朝廷を護り、国家を護るといふ義務を負わされているといふ一つの権門であるといふ黒田氏の理解は、一面ではあたっているといわなければならない。しかし、これで幕府の本質を説明できるかという点、私にはそう思われない。すべて盾の一面ではなく総体として評価することになれば、物の評価はできないであろう。何よりも武家の政権をつくってそれを支えた人びとの努力と成果を、このような理解で正しく評価できるだろうかという点に強い疑問を感じるわけである。

そこで、こういう疑問から発して、今まで全く論ぜられていないということではないが、鎌倉幕府は京都の朝廷から半独立的な東国政権であったという東国政権論をもう一度むし返してみたいと思う。

鎌倉幕府の訴訟制度の仕事をした時に、幕府の成立の問題を考えて、成立の時点が寿永二年の十月宣旨に求め、その時の幕府の性格を東国行政権の獲得と説明したことがある。この主張は、その後いろいろ難点もあったが、戦後の数多くの細かな研究の中で、私が主張した一番大事なところが取上げられないで、その次に出現する文治の守護地頭設置への移行の問題の中に東国政権論がぼかされてしまったということがある（私がきちんとやれなかったこともあるが）。本日の話の趣旨には、かつて主張した東国政権論をもう一度別の点を補強して主張し

てみたいということも多少あるわけである。

そこで少し詳しくなるが、鎌倉幕府が成立する過程をもう一度ふり返ってみると、次のような点が私には注目される。それはご承知の通り、頼朝は京都における治承四年の以仁王の挙兵をきっかけにして、伊豆の流人の身から兵を起すわけであるが、『吾妻鏡』に以仁王の令旨が載っている。その最初に「奉最勝王勅傳云々」といふ書き出しがある。つまり以仁王を最勝王と称しており、平家を反逆者とし、また仏法に対する反逆者も仏敵としてこれを打ちほろぼすということが本文の中に書いてある。

この文書は本物ではなく、後世つくられたものではないかという見方が強いのであるが、必ずしもそう断定するにも及ばないと私は考えるが、仮りに当時のものでないとしても、当時の確実な史料として京都の藤原兼実の日記である『玉葉』とか或は歌人として知られる藤原定家の日記である『明月記』があるので、そういう日記の中に以仁王のことを最勝親王と呼んで、頼朝がかついでいるということが何回も出てきている。最勝王の宣と称して武士に命令しているということが書いてある。特に『玉葉』は、頼朝が最勝王の宣を奉じて伊勢神宮に願文を納めているということが書いてある。以仁王は京都で討死したはずなのに生きていると称して神に祈願しているのはどうもおかしい。神に嘘をつくことがあるだろうかという風にして疑問の記事を書いている。

次に富士川の戦いで平家が西走した後、頼朝の軍がこれを追って京都にのぼるかどうか意見が二つに分れるという有名な話がある。結論

的には鎌倉に戻って東国を固めるべきだという意見を、頼朝が一番頼りにしている武將の平広常とか千葉常胤というような豪族が主張して、この主張が通って、頼朝は鎌倉に引揚げたのであるが、その当時でお京都では頼朝が上京し、広常らが以仁王をまもって鎌倉の留守をまもるのだという噂が伝えられている。

以上のことから考えると、頼朝を支持した関東の豪族層の主張というものは、頼朝の上に以仁王或いはそれに相当する皇族的な人物をかついで東国を固める。そして京都の支配から独立した東国を地盤とする一つの国家をつくることをめざしたのではないかと考えたいのである。

京都の朝廷に対して何ほどか独立した国家を樹立するには、頼朝のような身分では足りないものであって、もっと高貴な身分を奉じなければならぬという根強い身分序列の觀念があった。天皇から皇族、更に摂関家、その下の公家などの身分序列の觀念があつて、それに裏うちされた主張が、平家を代弁者とする京都朝廷の圧力に反旗をひるがえした関東の豪族層の基本的な主張であつたと私は考えたい。これはまさに天皇家に対する貴種信仰即ち天皇を最も高貴な身分と仰ぐ考え方によりかかりながら、京都朝廷の支配から離脱するという考え方だと思ふのである。

このような平広常、千葉常胤を代表とする人びとの主張に対して頼朝の立場は極めて弱かつたはずである。彼自身の貴種性は前述のランクでみれば極めて低いはずである。彼自身には武力は全くないのである。彼程度の身分で武力、実力をもっている者はその当時の関東を見渡しても決して少くはない。例えば甲斐源氏の武田氏や常陸の佐竹氏、

更にひと足さきに行動を起している信州の義仲などがある。

このようにしてみると、頼朝が彼自身の立場を固めるためにはどういうことをしなければならぬかというところ、まず第一に東国の独立を主張する豪族層を分裂させてその力を弱めることである。第二に彼自身のライバル、つまり武田氏や佐竹氏などを弱倒すことである。第三に京都の朝廷から或る程度の東国支配権を獲得して豪族層の欲求に或る程度答へなければならぬことであらうと思う。

第一については、寿永二年の末に行われた平広常の殺害である。広常は最も強硬な独立論者であり、頼朝に対しても下馬して礼をしなかつた氣位の高い豪族であつたわけだが、頼朝に殺された。この事件について、後に頼朝はこの男は京都の朝廷に対して不忠の者だったので殺したのだと告白している。これはご承知のように『愚管抄』に出てくる言葉である。第二の点は、佐竹氏の追放であり、武田一族の殺戮であり、義仲との争いであることは改めていうまでもない。第三の点が先に指摘した寿永二年十月の宣旨による東国行政権、より正確に言えば東国の国衙の指揮権の獲得である。

このようにして寿永二年の末頃の段階では、頼朝は東国独立政権の欲求に或る程度答へながら、他面では王朝と結ぶことによって彼自身の立場を強めようとしていたわけである。この後の経過は細かく述べないが、その次の画期は文治元年末のいわゆる守護地頭の設置である。

この事件は頼朝の支配領域の拡大という意味では非常に画期的な大発展と評価されるが、これから数年にわたる京都朝廷勢力との激しい戦いの中で頼朝は結果的には大幅に敗退する。例えばせっかく諸国の

在庁官人の指揮権を朝廷から獲得しながら、僅かの間に、在庁官人は文書を作成する点に限って頼朝の命令を聞けばよいことになる。これでは、せっかく獲得した国衙在庁指揮権の大半を放棄したということになる。

もう一つは非常に大事だと思うが、全国の武士の軍事指揮権を掌握しようとしてついに失敗に帰するのである。さきほどあげた京都大番役について見ると、頼朝は全国の武士の指揮権を掌握して、この権限によって全国の武士を京都に召集して大番役を勤めさせるということを望んだと考えられるが、最終的にはこれは実現せず頼朝の家来である御家人だけを使えということになる。これも極めて大きな彼の権限の後退であるといわなければならない。

このようにしてせっかく寿永二年の段階で或る程度獲得した東国行政権というものの実質が、地域的には全国に拡がる段階、それから数年間の段階で、逆に実質は非常に弱められたというふうに私は考えたのである。

この後の頼朝の政治的努力はどういうことに向けられるかというところ、彼は御家人の統率者としての地位、棟梁としての地位を強化すること、一切の努力が向けられると考えられる。

第一が鎌倉幕府の官僚制の整備であり、官僚制による御家人統制の強化である。

第二が王朝の權威にすぎる方策である。その第一はいうまでもなく將軍宣下であって、これは彼の強い希望にもかかわらず後白河法皇の生存中にはついに実現出来なかったが、法皇の死後ようやく征夷大將軍

をもちうることができた。職名の權威によって御家人に対する自分の軍事的權威を飾ることが將軍職獲得の目的である。もう一つは、多分に推測が入るわけだが、頼朝の晩年に、頼朝らしからぬことをした例として引かれる入内工作である。つまり頼朝は娘を後鳥羽天皇の後宮に入れる希望を抱いて、初めは長女の大姫に望みを託し、彼女が病気で亡くなると次女の乙姫を入内させようとしたことがある。これは歴史的な先蹤として藤原摂関家の歴代の例があり、更に極めて近い例として平清盛の例があるから、頼朝は自分の娘を朝廷に入れて外孫を天皇にして、つまり天皇家の外戚になることを望んだのだと理解して、いよいよ彼の朝廷への接近の重要な現れというふうに考えて、せっかく武家政治をつくりながら、最後の段階で武家政治の創始者らしからぬことをしたと解釈されている。しかし恐らくそうではないであろう。娘を天皇家に入れて、生れた男子を鎌倉に迎えるということが彼の望みであったであろうと私は考えるわけである。

頼朝が建久十年正月に亡くなると子供の頼家があとを継ぐが、二代將軍頼家がやはり父の頼朝の希望をうけついで何とか乙姫を朝廷へ入内させようとするのだが、乙姫も病気でなくなったために実現しない。その後頼家が失脚し、実朝が三代將軍になるのはご承知の通りだが、実朝が殺される前年に政子が京都へ行って後鳥羽上皇の皇子を鎌倉に迎えようとして画策している。これは実朝の生命が長くないことを見越してその後を考えたのだといわれているが、恐らくそうではないだろう。実朝がいても構わないのであって、実朝の上に親王をもってくるといふことであって、つまり大姫なり乙姫を朝廷に入れて外孫を

鎌倉を迎えることの代案であり、最初に頼朝が兵を挙げたとき、頼朝が呼応した以仁王をかついで武家政権をつくったという、そのたて前の再現である。ところが政子の要請は後鳥羽上皇によって拒否される。この時上皇は「なんで息子を鎌倉にやって日本国を二つにするようなことを自分がするものぞ」と言ったわけだが（「愚管抄」、これこそまさに鎌倉側の狙いをずばり看破したものであった）。

その後、これが実現しなかったものだから、藤原道家の幼少の子供を迎える。これが頼経で藤原将軍（摂家将軍）といわれている。これはいわば親王将軍の代案である。

なお、少し先走るが、その後藤原将軍二代のあと、後嵯峨上皇の息子である宗尊親王を迎えて、ついに初めて親王将軍が実現する。この時点だけで見れば、後嵯峨院政と幕府との妥協の産物として親王将軍が実現したのだというふうに考えられているが、長期的に見ると、これは鎌倉幕府が創立以来求めていたものの実現といわなければならない。事実の点では先に進んだが、以上のように考えると頼朝の文治ノ承久の乱までというものは東国独立論がまさに黒田俊雄氏のいわれるような権門体制的なあり方、つまり幕府が京都朝廷の番犬として仕えるというあり方になかば変った時期というふうに考えることができると思う。

恐らく承久の乱の勃発には、そういう状況に対する東国の豪族層その他広く東国武士層の不満が根底にあったと考えたいのであって、この点は承久の乱と京都の側、後鳥羽上皇の側からの政権回復運動としてだけ理解していた従来の考え方をもう一度考え直してみる必要があるが

ろうかと思うが、それはここでは立入らないとして、そのような状況を受けついで承久以後の鎌倉幕府というものは再びかつての東国独立的な体制への努力を進めるわけである。

その最もはつきりしたあらわれとしてやはり御成敗式目の制定をあげなければならないと思う。今日残っているのは五十一ヶ条であるが、最初はあれほどにもなかったのではないかと思うが、ともかくあのままであるとしても、僅か五十一ヶ条の律令にくらべれば極めて小規模なしかも律令ほどの法典として整った形もつていないが、制定の意欲は大変なものであって、京都の律令に対して武家の法典をつくるのだという強い意欲に裏うちされたものであったわけである。

更に引続いて裁判制度の充実があるわけだが、これなどはまさに裁判の公正をモットーとし、特に身分によって判定が左右されることをなくするという点をうち出しているのである。

それから頼朝の初期に史料的に少し出てくる西国の境界争論について（これも前に主張したことがあって、いまだ十分な賛同は得られないのだが）、とくに国と国との境界の争いについて述べたい。

例えば摂津国と播磨国の境界争いとか、武蔵国と相模国の境界争いとかのような国と国との境界争いが起った場合、西国の方の争いは朝廷にお願いするという原則を屢々幕府が言明している。これを私は、東国の争いは幕府が裁定権をもっているということの裏返し表現と読むわけだが、そういう形で東国の境界裁定権というものが特に承久以後確定すると考えたのである。

先ほど触れた京都大番役を（特に北条泰時の時代であるが）大幅に

縮少することをやっている。ところが文永以降、とくに蒙古襲来のニュースが入って、その防禦態勢を固めるようになった頃から、頻りに全国的な支配権を獲得する方向に幕府が乗り出してくる。その限りにおいて東国独立論は後退するのである。

そうであるから、文永以降幕府の滅亡迄は、全国支配体制の強化ということで朝廷の支配権の奪取に向うという傾向が確かに強いわけであるが、他面、天皇の権威をかりるという限りにおいてそれへの接近が同時に考えられなければならないわけである。

そのようにみると、その次の建武新政下に（僅か二年たらずであるが）において、足利尊氏の弟の直義が後醍醐天皇の皇子成良親王を奉じて鎌倉に下って東国を支配するという事実があるが、これはまさに東国政権の復活である。直義自身の政治思想を併せ考えると、これは鎌倉前期―承久の乱から文永までの間―の東国独立体制にもう一度戻ろうとしたものと理解できると思う。しかしこれはご承知のように、僅かの間で消滅し足利氏は京都を本拠として幕府をつくるということになるわけである。その限りにおいて武家政権の朝廷への回帰が行われる時期であると考えてよいだろうと思われる。

しかし南北朝六十年間の争乱において、屢々皇族をかつぐ事実が見られる。これは一面、貴種信仰が衰えていないことをあらわすが、こうした事実が度重なることによって逆に貴種信仰が薄れて行く。つまり天皇家の権威が以前にくらべて意味をもたなくなってくる一面があることを指摘したいわけである。天皇家の権威をかりて武家の棟梁として武士に臨むということは、武家の棟梁としての権威が天皇の権威

と切り離せないものとして考えられていたことを示すものであるが、南北朝の争乱の帰結として、そのような性質をもった棟梁の権威の重要さが減じて、幕府のもっている国政権の方の重要さの方が認識されるというふうに変ってくると思われる。

その段階であらわれるのが足利義満による明への朝貢である。これは日本が明の冊封体制の中へ巻き込まれる、つまり明の冊封を受けて日本の国王となるという体制であるが、これについてもかつては明から色々なものを輸入するという対明貿易の便利上から冊封体制を受入れたのだというように理解されていたわけである。私はそのようなことを否定しないが、むしろそれよりは冊封を受けることによって義満の日本における日本国王としての地位を明の皇帝によって保障してもらおうという点が、義満にとつて重要であつたのであらうと考える。これは中国の皇帝の周圉辺境の諸国に対する支配体制をのぞいてみるとわかるように、例えば明の皇帝が、日本の国王は足利義満であるということに承認し、それを国王に封ずるということになると、若し日本の中に反乱がおきて足利氏以外の者が事実の上で王権を奪った場合に、明はそれを認めない、あくまで明が認めたものだけが日本の国王であるとする体制である。だから新しく実力で王になった者は明へ行って国王の冊封を受け、更に明との国家貿易に参加しようと思つても、明の方でこれを拒否するというのが冊封体制の意味である。そういう形で明の皇帝によって日本の王の位が保障されるという意味である。恐らく当時としてはそれなりに合理的な考え方であつただろうと思う。

これまでの長い伝統的な身分序列の觀念、特に天皇家に対する貴種

信仰からすると、義満が明の冊封を受けることは、甚だけしからぬ考え方ということになるわけで、史料的にはそう多く残っていないけれども、当時の貴族が非常に反撥したことは十分理解できるし、義満が死亡後管領の斯波義将がそれを非難し、次の將軍義持の代になって対明關係を断絶したことはよく知られている通りである。しかし、その次の義教の代になると若干の修正をしてもう一度対明關係を復活する。つまり強い伝統的觀念からの反撥を少し慰撫するという形で事態をもとに戻そうというわけであったと思う。

南北朝争乱の間に色々な古い意識が薄れたと同じように、義満のしいた冊封体制が一面では今述べたように強い反撥を受けながらも、他面において天皇家及びそれを取巻く貴族層の伝統的權威を次第にうすめ、弱めていったらうということはいえるだろうと思う。義満・義教以後になると、日本国王としての意識を持続し強化することの努力が足利將軍の重要な課題となってくる。恐らく義教將軍と関東管領との長年に亘る抗争の末、永享の乱で関東管領を滅す事件とか、初めて比叡山に討伐軍を向ける（結果的には失敗したが、後には信長があるだけである）とかの軍事行動を強行するというのも一に義教將軍の王權の持主としての誇りというか王權を確立しようとする努力のあらわれというふうにしか考えられないわけである。

後の方は駆け足になったが、もう一度まとめれば、中世の前期には、特に頼朝の時代に前面に押し出された武家の棟梁なるものの地位權限の保障を求めることに幕府の努力が傾注された。棟梁とは集団において主人が従者を支配する權限の最高總括的な形であって、それは本来

維持の保障をもたない。主人の力の強弱と変化によって幾らでも家來の数などが変化するという性質のものだからである。そこで、武家の棟梁の權限を保障するものを何に求めるかということが鎌倉幕府の將軍にとって最大の課題であったと思う。その場合に京都の朝廷の權威をかりなければならぬということになるのだが、それが恐らく南北朝を経過して足利義満の時代ぐらになると、ようやく棟梁觀念とそれを重視する考え方というものが急速に弱まってくる。そしてもう一つの國政權の頂点としての、事実上の国王の地位權限を確立する方向に課題がきりかえられて行くと考えたいのである。

（本稿は昭和五十年十月五日の弘前大学國史研究会での公開講演をまとめたものである。責任は編集係にある。）